
リュウとマナと魔法

ほしぞらひかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リユウとマナと魔法

【Nコード】

N6185J

【作者名】

ほしぞらひかり

【あらすじ】

時は現代、人間界。魔力の少ない世界の日本国。

竜王という白竜は、生まれ変わった主、アリアを護るため、人間の少年に姿を変えて、アリアの生まれ変わり愛美の傍に居る。

白竜という本当の姿を持つ月野竜と、アリアという主の生まれ変わりの愛美との、不思議な生活を覗きやしょう。

プロローグ…とか言ってみる（前書き）

『姫と悪魔と魔法』と同時進行でやらせていただきます。
姫と悪魔と魔法に出てくるコのお話です。

竜王とアリア改め、リュウとマナミのお話の始まり始まり・・・。

プロローグ…とか言ってみる

アリア お前の身体が死んで二千の刻が過ぎた頃だ

アリアは夢を見ている

夢ではアリアはアリアじゃない

魔力の少ない世界に生きる アリアが望み焦がれた生き物だ

彼女の名をマナミという 魔力を持たない人間の少女

運動もダメだし頭も残念 それでも明るく笑う アリアとは違うような同じような少女

夢のアリア マナミには家族がいる

父 母 兄 妹 そしてマナだ

アリア マナとなったお前は幸せだろう

闇を知らないから 危機が無いから 殺さないから

それでもアリア 俺の唯一の主

俺はマナミの友達として傍にいた

名前も性格も魔法で変えたけど 寂しい気持ちは変えられない

だから アリア ごめんなさい

水底の棺に眠る アリアの死んで消えた体が元に戻る時 俺はマナ
ミを起こしてアリアと呼ぶ

だから 早く 俺の名を呼んで

俺の名はツキノリュウじゃない 竜王だ 竜王なんだよ・・・

俺を呼んで 撫でて 触れて 歌を聴かせて・・・

コ・・・コ・・・ハ？ ド・・・コ・・・？

ア・・・リア アリア・・・

「アリア・・・」

そう呟いて、少年は目覚めました。

しばらくボケっとして、ベッドから下ります。

窓を開けるとスグ隣も窓。

その窓の中で眠る少女を想いつつ、竜の一日が始まります。

ブログ…とか言ってみる（後書き）

すぐ傍にいるのに遠く、見えているのに視えない。

自分を忘れた主の生まれ変わりの近くにいる白竜の、想いと強さ、生き物らしい弱さなどを描きます。

2010年1月30日土曜日。明日で1月が終わりやがります。

二月が！二月が来るウ・・・助けてエエエエ！！テストヤダあああああ！！！！

銀魂ファンの皆様、紛らわしくて本当にスイマセン（前書き）

これは、銀魂じゃない。

ヒロインと作者が銀魂大好きなだけなんです。

その中でも、桂小太郎だ〜い好き????

銀魂ファンの皆様、紛らわしくて本当にスイマセン

肩にかかりそうな白い髪の少年が、慣れた手つきで制服を着ています。

少年は、爬虫類のような眼を持ち、その年頃の少年とは思えない大人びた、綺麗な顔をしています。

制服を着た少年は、眼鏡のような魔法具を掛け、性格を変えて、爬虫類のような眼を隠しました。

彼の名は月野^{つきの} 竜^{りゅう}。

本当の名前は竜王^{りゅうおう}。

事情は後々で掘り下します。

竜は全開の窓を越え、隣の窓に到着しました。

彼のお隣は、愛美^{まなみ}という少女です。

竜は愛美ちゃんを迎えに行くのです。

愛美は、お隣が竜ということで、超不用心に窓の鍵を掛けていません。
ん。

と、いうことで竜は、いつものように普通に侵入します。

竜が見ると、愛美はいつものように寝ていました。

竜は一度、桂小太郎（銀魂という漫画のキャラクター）と目を合わせ、愛美を起こしに近寄ります。

竜が愛美を覗きこむと、愛美は何かを感じ取り目を開けます。

竜の薄い青の眼と、愛美の茶色の眼が合いました。

「おはよう。 竜」

『おはよう 竜王』

マナミとアリアが重なって、

「おはよう。 マナ」

竜は返しました。

桂小太郎のイラストの入った黄色の時計が七時を告げます。

「おはよう竜王。またお姫様を起こしに行ったのかイ？」

両目を眼帯で覆った長い金髪の男、ロジャーが言いました。

「ああ」

竜王と呼ばれた竜は、何だか桂のグッズが増えていたと言いました。

「桂あ？好きだねえマナミ姫。好きそうなコだったけどね。桂」

竜はムスツと黙っています。

「おや？竜王は桂さん嫌い？」

「スキ」

「そう」

何でもない会話を済ませ、竜は愛美と登校です。

竜と愛美は、知られていない抜け道を通り、見事に中学校に到着しました。

「早いね。竜」

「アンダーテイカーが見つけてきた」

アンダーテイカーとは、英語で葬儀屋つていう意味です。

愛美はそんなの知りません。竜の友達だと思っています。

「アンダーテイカーさんは凄いね」

「ああ」

2人は校門を潜りました。

2人の上空を、米軍の戦闘機がかなり迷惑な騒音を轟かせて飛んでいます。

愛美の「うるさいな」という声は、竜だからこそ聞こえたようです。

「あ、やつとだ」

戦闘機が過ぎ去ったかと思えばもう一機。かなりウザいです。

でもそれは、ココ、沖縄では当たり前の事でした。

「アリアに見せたら、奴ら間違いなく墜落させられるだろうな」
竜の呟きは、爆音によってかき消されていきました。

「そういえばさ」

「む？」

体育の時間、竜は愛美に話しかけました。

「マナは魔法信じてる？」

「勿論。絶対にあるよ」

「ん」

竜は愛美に確認すると、思い切って言いました。

「銀魂では誰が魔力ありそう？」

間違った。

「桂小太郎くん。魔法使えそう」

『違うんだマナ。ヅラ様は関係ないんだ。銀魂も関係ないんだ』

性格を変えている分、いつもはすんなり言える事も言えずにもどかしい。それが今の竜王でした。

「そうか。桂か」

「マ王ワールドでは使ってたよ」

「知らねエよ。何だよ魔王ワールドって。ヅラ様がもう魔王だよ最早」

とりあえず50メートルを走り終えた竜は戻ると、今度こそ愛美に言いました。

「俺、魔法使い」

愛美はきよとん。

ダフリューエイチワイ

「WHY? ホワイ？」

「俺は実は魔法使い」

『実は龍』

体育の時間に愛美にだけ、竜は言いました。

愛美は…

「……」

無言で輝いていました。

帰り道にて。

「ねえね。竜ってホントに魔法が使えるの？」

愛美は楽しそうに聞いてきました。

「疑うか？」

「いやあ」

愛美の表情は本当に楽しそうです。

「でも何で、教えてくれたの？しかも中学に入って」

最もな質問です。

「いや、魔法とか信じていない奴に言っただってアレじゃん」

「そっか」

すると愛美ちゃんワールドが炸裂します。

「ああ！じゃあじゃあ、カードキャプターさくらのケロちゃんとか

ユエさんとかいるの！？」

「いねえよ」

「残念」

何気ない(?) 会話をしつつ、2人は家に帰りました。

勿論、愛美は誰にも竜の事を言わなかったそう。

銀魂ファンの皆様、紛らわしくて本当にスイマセン（後書き）

桂小太郎くんの話しかしてねエエエ！！

いくら小太郎ファンだからってこれはないわ！

次からは坂田銀時とか高杉晋助とか坂本辰馬とかフルに使っていう。

・・・。

……アレ？攘夷ばっかだ。

月姫の白竜（前書き）

こっちは姫と悪魔と魔法よりやりにくい気がします。

月姫の白竜

竜が愛美に「俺は魔法使い」宣言した次の日のことです。

愛美が風邪をひいてダウンしたので、竜も学校を休みました。

愛美のお兄さんは学校に行つて、家にはリュウとマナだけです。

「大丈夫か？魔法使おうか？」

「ふにいいい」

「そうか」

竜は密かに、話したからか？と思っていました。

「夢を見たよ」

「？」

愛美の言葉に、竜は首を傾げます。

「桂小太郎さまが出て来なすった」

「ヅラ様がね」

道理で嬉しそうなワケだ。

「でね、小太郎くん、何も言わないで私の後ろを指すの。振り向い

たらなんと」

「なんと？」

「鏡があつた」

「鏡？」

「で、映つてるのは“私”じゃなかった」

「……」

愛美は自分の天パをつまみます。

「青い目をした、サラサラストレートの長い黒髪の女の子が映つてた」

竜は眼鏡の奥の眼を細め、再び何かを決心して眼鏡（魔法具）を外しました。

「俺の眼鏡は魔法具だ」

「魔法？」

「コレをつけて、性格と目を変えてる」

愛美の見る竜の眼は、爬虫類のような薄いブルーの瞳です。

「うん。何で？」

「護るため。アリアを」

愛美にも聞き覚えのある名前でした。

竜が昔から言ってた名前です。

その時がきたら話すと言っていました。

「アリアは俺の主で、俺の護る者」

竜は愛美にアリアについて話してくれました。

「アリアの姿は、エルフみたいに綺麗な容姿。髪は黒で光をはじく。瞳は母親譲りの青」

愛美の夢に出てきたそれです。

「月の魔力を持つ。精霊に愛されたから、世界はアリアに従うし、自然界…森羅万象アリアは操り、森羅はアリアを護る。魔力じゃないからとても強い」

愛美は超能力者のな？と思いました。

「強いから綺麗なアリアには沢山友達がいる。俺もそうと言ってくれた。だからアリアは全部に恵まれてると思われてたけど…」

竜はちよつと黙って続けます。

「アリアは愛する者を死なせてあげた。アリアは優しいから、自分が殺したと言った。好きな者を殺すという闇を負っても、アリアは他の大切な者を糧に、闇の世界で月みたく輝いた」

愛美も月の美しさは知っています。

「アリアは殺しを嫌ったけど、戦争では殺さなきゃいけない。沢山アリアは殺した」

何だか飛びすぎな気がします、あえてツツコミません。

またいつか話してくれるかもしれません。

「アリアの戦い方は綺麗だから、皆が憧れた。戦争が終わるまで」
「どうやって終わったの？」と愛美に聞かれた竜は、決まってる前置

きし、

「アリアが闇の王を殺したんだ」

と言いました。続けて、

「その闇の王も、アリアの大切な者の一人だった」と言いました。

外の天気は快晴で、沖縄ですね的な空が広がっています。

俯いたままの竜は、また眠りだした愛美の横にいます。

愛美が竜に触れて、寝言を言いました。

「傍にいてくれるでしょ？竜王」

竜王と呼ばれた竜王が驚いて振り向いた時には、既に愛美は夢の世界にダイブした時でした。

月姫の白竜（後書き）

私も最近桂小太郎が夢に現れました。

あの人ハンパない。

綺麗、カワイイ、カッコいい、美人、素敵。

あれ、結局小太郎さまのことしか言っていないぞ。どういふことだ。
ま、いいか。

無の月姫（前書き）

テストという呪縛から解放されました。アニメイトで銀魂のキャラグッズと前売り券買おうと思います。
きょうで二月のやつが過ぎ去ります。寂しいです。

無の月姫

大木の下で、白く長い髪に、不思議な服を着た大人の姿の竜王が寝ています。

羽ばたく音が近づいてきて、すぐそこに何かが降り立ちました。

竜王が目を開けるとそこには、銀に輝く黒髪に、瞳孔の存在の分からない青い瞳の少女が立っていました。

竜王がはつきりと目を開けたのを確認した少女は、大きな白い翼を上下に動かします。

少女は竜王に近づくと、その雪のように白い頭を優しく撫でてあげました。

何度みた夢だろう、と竜は思いました。

夢が覚めるまで、竜はアリアに会えて幸せでした。

竜は夢から覚めました。

そこはいつもの部屋で、隣の窓の向こうには、アリアの夢の姿の愛美がいます。

そういえば今日から夏服です。

竜は半袖の上着を着け、長ズボンを装備します。靴下も忘れません。既に愛美には魔力の存在を教えているので、容赦なく魔法でマナ部屋に侵入します。

何だか銀魂グッズが増えています。

なんと、高杉晋助がいらっしゃいました。ストラップです。

竜は気にする事無く愛美を起こしにかかります。

あらかじめ録音しておいた石田彰さん（桂小太郎の声優）の声で起こします。

『ヅラじゃない桂だアア！！』（桂さまの名台詞）

愛美はどガバツと起きました。

「あ、おはよう竜。あら？眼鏡は？」

「ん？ん」

「そうだよ。ちゃんと掛けないと」

会話ができています。凄い。

「おはよう竜王。魔法具を忘れていったの？」

「別に大したことない」

ロジャーに言われた竜は、素っ気なく返します。

「あれ、夏服？似合うよ」

「見えてるのか？」

両目眼帯男に言ってやると

「ううん。多分似合うよ」

そう返されました。

「竜く、学校行く」

「ああ！マナ、バカ兄…雷らいは？」

「いない。あつ、ヤバイ来た」

「走るぞ！」

「おう！」

竜と愛美のペアは走って登校しました。

「ホントにお似合いだった。竜くん」

ロジャーが見送りながら言いました。

お兄さんらしき人が慌てて出てきたけど、間に合わないね。

授業とか面倒くさいし楽しくないしつまらないしメンドくさいんで書きません。

もし書いてほしくばちゃんと感想送って来にゃ！
下校です。

愛美がまた桂小太郎の夢を見たと言ったので、竜も見た夢の話をしました。

「アリアさんの夢か。良かったね」

「うん」

楽しそうな愛美と嬉しそうな竜の二人は、まるで恋人同士のようにです。違うけど。

「そういえば、アリアさんってどんな人？」

「人じゃないんだ」

あや？と愛美が言ったので、性格変えてる竜王は、すらすらしゃべります。

「アリアの両親は天使とエルフ」

「マジでか！」

「で、悪魔とドラゴンと死神の血も流れ、力も持っているので人じゃない」

「ほえ」

「“無”という、全生物のどこでもない存在なんだ」

「無？それはアリアさんだけ？」

「無はアリアだけだ」

愛美が何とも言えない表情をしたので、竜は付け足しました。

「確かに、アリアは無で種族の仲間はいない。でも、アリアには想われるのが沢山いる」

愛美は安心したように言いました。

「竜もその中のひとりだね」

「そうだ」

竜は答えて言いました。

「アリアは、俺を『大切な存在』と言ってくれた」

そして、なぜか。本当になぜかそこから普通の話になりました。

「高杉ってカッコいいよね」

「マナは桂派じゃなかったか？」

「勿論！アイラブ小太郎さま？」

「俺は高杉より銀時がいいな。坂本も捨てがたい」

「いや、『銀魂攘夷ストパー美形コンビ』だ」

「さて、『銀魂攘夷天パコンビ』はどうなる？」

「私は『長髪で美人な天然ボケ』がいい。すなわち小太郎くん」

「最終地点はツラじゃねえか。それに、奴は天然バカだ」

「違う、小太郎くんは天然おバカだ。響きがいい。あとカワイイ」

「違う、バカだ」

「それは坂本さんだ」

「だったら高杉もだろ」

「ふあ？何故に？」

「ボケなさ過ぎだろあの野郎。やればできると信じてるぞ俺は」

「ボケない事がボケなんだよ。空知先生がおっしゃっていたではないか」

「何ソレ、新しいボケの形？あと何で桂口調？」

「こたは・・・」 「高杉はやはり・・・」 「銀さんってマヨネ

ーズ好きかね？」 「知らね」

帰宅。デカイ夕日が沈みゆきます。

竜と愛美は窓越しに、まだ語っていました。

勿論、銀魂ネタを。

「・・・」 「・・・」 「ツラは」 「白夜叉は」

「鬼兵隊は」 「夜兎は」

「だ〜から・・・」

「「最終地点は攘夷iiiiiiii!」」

「……。何の話してんだ？」
ロジャーが頭に白い猫を乗せて呟いていました。

無の月姫（後書き）

最終地点は石田彰アアアアア！！！！！！

ひかりも断然桂派ですね。

だって彼、可愛くて仕方ない。

頭はイイのに、行動が何かおバカ？

顔もイイのに、行動こそ理解不能なこと多し？

でもやっぱり貴公子？

なんかもう、二次元に飛び出して小太郎くんをテイクアウトして来たい。

なんかもう、二次元にダイブして小太郎くんを捕まえたい。

ぎゅーってしたい！！

ってアレ？俺・・・キモくね？みんな・・・引いてね？

でもさ、こんな感じだとおもうよ。桂のファンも他のファンの人も。多分。

いや・・・多分。きつと・・・。

私は・・・大丈夫・・・なんですか？

アレ・・・そういや最近、友達に

「とって来たるか？」

と言いそうになって、

「とって小太郎こたろか？」

と言ったな。

逝った。

言った。

行った。

誰か助けてください。
いや、やっぱりいや。

夢のみた過去夢 戦場の銀蝶（前書き）

文字制限って、四千じゃなく四万だったんだ……。へ。
と、思いました。

夢のみた過去夢 戦場の銀蝶

竜王がアリアの夢を見た夜、なんやかんやで愛美も夢を見ました。

夢の中で、愛美は空間に立っていました。

真っ白な世界で、下から雪のようなモノが降っています。

キラキラとした道があったので、愛美は辿って行きました。穴がありました。

愛美は迷うことなく飛び込みました。

夢ってそんなもんです。

愛美は夢を見ていました。

愛美の見る先には、長い銀に輝く黒髪に、瞳孔の存在のわからない青い瞳の、綺麗な女性がいました。

彼女が、竜が言っていた『アリア』だと、愛美はわかりました。

だって夢だもん。分かるもん。

アリアは長い髪をポニーテールにしているので、エルフの尖った耳が見えています。

琴ことのような楽器を弾いていました。

隣には、嬉しそうな無表情の竜王がいます。

雪のような白い髪と、輝く黒髪のセットは見事なものでした。

場面が変わって戦場になりました。

夜の帳とばりに、黒い城が見えます。

「闇の古城」

愛美はそれを知っていました。

アリアも戦っていました。

相手は漆黒の髪と目の、黒ずくめの男です。

“闇の王”と呼ばれる男でした。

白の衣で 華麗に 戦場を駆る

闇の使者は まるで花

ヒトからヒトへ 彼の王は舞い斬り裂く

蝶が花から花へ渡り蜜を吸うように ヒトからヒトへ命を吸う

そんな詩が詠われました。

魔法界の王アリアをヒトは“戦場の銀蝶”と呼びました。

幾日か過ぎ、アリアは言いました。

「終わらせよう。死と悲しみを生む戦を」

近くにいたふたりが頷きます。

アリアの執事のルカと、王佐のロンドです。

動きやすそうな白い着物と、かさばらなくて軽い、デザインの良い
防具を身に付けたアリアは、空を飛ぶ白竜、竜王を見ました。

「成就？」

竜王がテレパシーで聞いてきました。

「そう」とアリアは返します。

「『夢世界』に、先に行つて」

竜王は従つて、魔法界及び世界からいなくなりました。

アリアには、結末までの道のりは分からないけど、分かっている事
もありました。

「戦は終わり、私は死ぬ。そして、夢世界へ行く」

そして、再びこの世界に戻ってくる。

どれほどの時を刻んでも。

戦が始まり、すぐにアリアは真っ黒な世界に落ちました。

「？」

アリアは何が何だか分からずに、キョロキョロと辺りを見回します。すると、突然闇が晴れました。

世界が見えると、そこには自軍の死体の山がありました。

アリアは返り血で赤くなり、その手には、命を消した感覚が残っていました。

「……わ…私が…？」

状況をアリアが理解した途端、澄んだ綺麗な、それでいてどこか悲しそうな声音の音が聞こえました。

近くなような遠くなような。

何処からの音か、何の音かも分からない音は、アリアの中に響きました。

闇の王がやってきました。

「ゲイル」

呼ばれた彼は、アリアに言いました。

「戦争は終わったぞ」

そう言いました。

「何で？私を知ってる筈はずのゲイルが。何で？」

ゲイルは真っ直ぐな目のまま言いました。

「この世界を壊すため」

そういえば昔、ゲイルは言っていました。

「俺達から愛する者を奪ったこの世界を、俺は許さない」

アリアの持つ魔剣まけんが燃え上がり、アリアはゲイルを刺しました。

「もう二度と、愛する者を殺したくなかった」

目を見開くゲイルは、アリアの（顔が見えないので）頭を見下ろしました。

アリアは、グイルの黒い目を見上げると、小さな声で言いました。

「私は、グイルが・・・」

闇の王は倒れて死にました。

沈黙がありました。

確認のためにアリアが周囲の死体を見渡しました。

そこに、王佐ロンドはいませんでした。

さすがにグイルも、自身が親のように慕っていたロンド先生は殺せなかったようです。

「貴方達は、生きなければいけません。私の代わりに」

アリアは死体に語りかけました。

そして、足元の綺麗な短剣を拾い上げると、その胸にかざしました。赤い血が地面に落ちました。

「またね」

月は昇っていった

星を見下ろす高みへと

静かに 気高く 清らかに

堕ちていった

「む？」

愛美は起きました。

そこは自分の部屋でした。

現在は午後十一時。一時間しか寝ていません。

愛美は素直に再び眠りにつきました。

今度は大好きな銀魂の夢をみました。

「夢では、人間になりたい。魔力の無い女の子に」

アリアは、愛美まなみに生まれる前にそう言いました。

竜王は頷いて、一足先に日本国の沖縄にやってきました。

そして、アリアは愛美、竜王は月野 竜となりました。

夢のみた過去夢 戦場の銀蝶（後書き）

かくして、リュウとマナと魔法が始まるワケでございます。
わはは。

沖縄美ら海水族館に行ってきました（前書き）

久しぶりにまた行きたいな、美ら海水族館。

あそこの大水槽の前で食べるアイスクリームはとりあえず絶品です。
お試しアレ。

沖縄美ら海水族館に行ってみました

「高杉って、過激なところに親近感持てるよな」

移動中のバスの中、竜はそんな事を言いました。

「そう?」

返したのは愛美で、本日は珍しくポニーテールにしています。（いつもの二つ結び）

「うん。俺の周り、過激派が勢ぞろいした世界だから」

「マジでか。桂的ポジションは?」

「いる」

愛美は桂小太郎さまが大好きです。

「それにしてもアレだね」

「ん?」

愛美がポッキー（ストロベリー味）を食べながら言いました。

「お兄ちゃんも来ればよかったのにね」

そう、実は愛美のお兄ちゃんも来る予定だったのです。

「何でよりによって『美ら海水族館を子供だけでめぐる』というめつたにない機会にさ、風邪をひいてダウンするのかね」

「誰かの呪いじゃね?」

竜はポッキー（チョコレート味）をポキポキしながら、無表情に言いました。

「誰の?」

アンダーテイカー
「葬儀屋?」

「そのころのロジャー・テイカー（竜の世話役、通称アンダーテイカー）」

「彼がいたら竜王とお姫様の距離が遠くなっちゃうからね」

透き通った声でそんなことを言いながら、水晶を覗いていました。映像は脳に直接入ってくるので、眼帯してても平気です。

「ま、静かだしいいんじゃないか」

「そだね」

残酷な会話をする2人を乗せ、バスは走ります。かれこれ数十分。到着です。

竜は帽子を深く（白髪が見えないように）かぶり直すと、リュック片手にバスを降りました。

日傘を片手に待っていた愛美と合流し、水族館入口を目指します。入ります。

まずはタッチプール『イノの生き物たち』で、海星くらを触り小魚を眺めます。

水に手を入れた愛美の所に、わっと小魚がやってきました。

「うはあ！凄いい！竜、見て見て！」

「・・・。マジか」

色々な海の可愛いお魚が、竜と愛美を楽しませてくれます。

愛美はよって来るお魚に、竜はサンゴにテンションを上げながら進みます。

そして『美ら海シアター』は何回か見た事あるのでスルーして、お目当ての水槽へ進みます。

それこそまさしく美ら海水族館が誇る世界最大級の水槽『黒潮の海』です。

巨大な水槽に、これまた巨大なジンベエザメと最大のエイ、マンタが複数泳ぎ、群れをなす魚たちが惜しげもなく全力で泳いでいるのです。

そんなとんでもない世界にはもう一つとんでもないイベントがあり、

それが今まさに行われるところでした。

それは、ご飯タイム。

上からやって来るご飯をジンベエザメが立ち泳ぎして、直立して食べるのを見る迫力の時間です。

「おおお」と竜。

「ほえ〜！」と愛美。

しばし見惚れていると、あっという間に終わってしまいました。

ぼけ〜とする竜を愛美がくいつと引つ張りました。

「ん？どうしたマナ」

「あれ！」

愛美が示す先はカフェ『オーシャンブルー』の 巨大水槽前の空席 でした。

「行くぞオ！マナ！」

「イエツサアア！」

竜の魔法と愛美の“生き物愛”で、見事、巨大水槽前の空席をゲットしました。

勝利。

「アイスクリーム食べよ」

「おう。俺バナラ」

「了解」

ちよくちよく愛美によって来る海の生き物たちを見ながら、2人はバナラと抹茶のアイスクリームを優雅に食べます。

しばらく休んでまた動きます。

『アクアルーム』は混んでいたので通り過ぎ、深海魚のいる『深層の海』ではしゃぎ、ショップで愛美がウミガメのぬいぐるみを買いました。

あとはオキちゃん劇場なるものを観て、マナティーみて、なぜかまた水族館に入ります。

しばらくして出てくると、日焼け止めを全力で塗りTシャツを着て、ビーチで遊びます。

観光客がなにやら「痛い」とか言っています。

「そりゃ真昼間から海に来ればヤケドするわな」

「沖縄と太陽をナメるな観光客」

愛美と竜はそう言いながら、海水浴を楽しみます。

「じゃあそろそろ」

「うん」

竜は自分とマナを真水（勿論魔法で召喚した）で洗い、さっさと着替えます。

そして予定通りに家路につきました。

「ただいま」

「おかえり竜王。どうだった？」

「楽しかった」

シンプルな感想を竜は言います。

「いい〜な。俺も行きたかったなア」

「誘った」

「そして俺は断った」

にこつとロジャーは言います。

「お姫さまの兄上は大丈夫かな？かなり悔しがってたけど」

「当たり前だろ。シスコンという人種だぞあれは」

竜の返事にロジャーはまた笑います。

「で？何もなかった？」

問われた竜は振り向くと、「あつた」と返しました。

「魚と、少しだけ水が反応してた」

「水・・・」

ロジャーはふむと呟くと、

「アリア姫第一配下。水」

と真面目に言いました。

「水と、その民が反応したってことは、もしかして？」

ロジャーと竜は目を合わせます。

竜は頷くと言いました。

「真名^{マナ}が戻る」

ロジャーもいいました。

「二千の時を超え、アリアがこの世に戻る」

「そしたらマナミは・・・」

「お兄ちゃんただいま」

「おかえり」

ふてくされた声が帰ってきました。

機嫌が悪いらしい奴は、放っておくに限ります。

愛美は自室に戻り、カメを机の上に飾ります。

最近飼いだめた白猫（性別オス）がすり寄って来ました。

「にゃ」

「にゃん、ベルちゃん、どちた？ごはん？」

「みにゃあ」

「ちょっか。じゃあマグロでも開けようか」

「にゃあ？」

ベルが嬉しそうに返事をしました。

沖縄美ら海水族館に行ってみました（後書き）

リユウとマナと魔法のパーティーについて、マスコットが入って来ました！

ただこのマスコット、ほかのとは一味違います！

まあエリザベスさんほどではないとは思いますが、ちょっと衝撃的な？感じですよ。

エリザベスを知らない人の為にかいておきますと、

エリザベスは、銀魂のマスコットキャラクター

エリザベスは、本作中よく出る桂小太郎のペット

エリザベスは、中身が・・・・・・・・オツ・・・・です。

竜王とマナの魔術師の兄（前書き）

愛美のお兄ちゃん登場です。

竜王とマナの魔術師の兄

寝つけずに夜の散歩に出た竜は、魔力の気配を感じて立ち止まりました。

その感じには覚えがありました。

竜は眼鏡型魔法具を外して視界を確保し、気配の中心へ向かいました。

黒の天然パーマの少年が、陰と陽の使い魔と、魔法の稽古けいこをしています。

それは紛れもなく愛美まなみの兄、雷らいでした。

「・・・・・・」

（あんなに魔力を出したら、気づかれる）

竜は変身術を解きました。

西洋と東洋の合わさった、細長い身体に、コウモリのような翼の生えた白いドラゴンです。

竜王は素早く夜空に上がると、雷を二つの使い魔から離し、適当に作った異空間に放りこみました。

自分も入りました。

「何？何？え？何？」

超慌てし雷が見えました。

竜王は手ごろな岩を生やすと、そこにちょこんと座りました。

雷は突然の巨大な神話の生き物にビビって、杖を構えました。

「俺は、お前を知っている」

竜王は挨拶代わりに、雷にテレパシーでそう言いました。

「え？」

「知ってる」

雷の戸惑いを感じても、竜王は気にせず続けます。

「魔力のある人。力を引き出したのは杖、杖を守る陰陽の命」

竜王をやつと理解した雷は、（今度は震えないで）杖を構えて警戒します。

「お前は、“アリア”を知ってる」

竜王が言つてやると、雷は名前に反応して気をゆるめます。

「アリア姫を知っているのか？何者だお前？」

「アリアの守護獣。お前はアリアに杖と、魔力を使う術^{すべ}を貰った？」
疑問形を入れてきた竜王に、雷は動揺したまま「そうだ」と答えました。

「アリアはなんて言つて？」

お前にその杖と二つの使え魔を託した？

「『あのこたちを頼みます』と。あの二人を杖から解放できるのは、俺だけつて」

竜王はこくと頷と、

「あれらは元ヒト。だが杖に縛られ主の亡き時も死ねなかった」

そう言いました。続いて、

「あれらはあれらの最初の主がアリアに託し、アリアがお前に託した存在」

と教えました。

「分かつてる。ところで…」

雷が言いました。

「アリア姫はお元気か？」

「死んだ」

雷の問いに、竜王は間髪入れずに答えました。

「身体が死んだ。魂は生きてる。もうすぐで、アリアは起きる」

竜王は一気に喋りました。

「死者は蘇らない。アリア姫も言っていた」

「死んだのは身体^{いれもの}。魂^{ホンモノ}は生きてる。それは、お前らの言う“死”じゃない」

竜王の答えに、雷は納得していません。

「でもそれはイイ」

「イイ？」

「いい」

竜王はこくこくします。

「お前は魔法を使えていない」

竜王の唐突な話題変更に、雷は不意をつかれます。

「そつ、それがどうした」

負けてたまるかと食いつきます。

「教える」

「……は？」

「教える」

「いや…何を？」

何かイラついた竜王が、ふつと息を吹きかけ転ばしてやります。

「あがつ」と言つて、雷はひっくり返ります。

「魔法の使い方、だ」

ひっくり返ったまま、雷は「はあ？」と間の抜けた声を出しました。

「いや、いいつて」

断ると、竜王は今度は火を吹こうと首を高く上げます。

「ああ！ すいません！ お願いします！ 是非ともお願いします！」

竜王が火をこきゅつと飲むと、雷は一息ついて、恐る恐る尋ねました。

「あの、でも何故？ あ、すいません。火は吹かないで」

「だって」

少し幼い物言いになった竜王は、長い尻尾しっぽを振ると、

「アリアを護らないといけないから」

と言つて、次に何かを言われる前に、雷を帰しました。

「お前が魔法を使えないと、俺たちが封印しているアリアアリアの魔力が、主に戻る」

今、岩にはひとりの青年が立っています。

雪のように白く長い髪に、爬虫類のような薄いブルーの瞳の、不思議な服を着ている彼は、肩掛けをいじりながら誰となく語りかけます。

「俺たちは、人間の愛美^{アリア}を護る。お前も、妹が苦しむのは見たくないとと思う。雷」

何も知らずに平和に眠る愛美を、ベルという白猫が見ています。オレンジのクッションの上から、優しい眼差しで、いつまでも見守っていました。

「にゃお」

竜王とマナの魔術師の兄（後書き）

シメは「にゃお？」

むかしむかし（前書き）

劇場版銀魂 新訳紅桜編をみてきました。
桂アアア！！素敵だアアア！！！！

むかしむかし

昔々 ある世界に少女がおりました

少女は泉に落下して溺れていました

そこへ運よく人が通りかかり 少女は救出されました

それは危機的状況を救ってくれたからこそ見えたのかもしれませんが それは美しい青年でした

その青年は 真っ直ぐな澄み渡った茶色い瞳に 整った顔立ちの 黒く長い髪の毛の

銀魂に出てくるあの・・・

「にゃーお」

素敵な夢をみていた愛美は、愛猫ベルによっておこされました。

「おはよう。ごはんをおくれイ」

ベルはそんなことを言ってきました。

昨日から、愛美と竜とロジャーの前でのみ喋っています。

「ベル…」

「にゃ？」

「何をするのオオ！せつかく桂が夢に出たのに！しかも美しかったのにイイ！（泣）！」

「知らんよ！俺だってお腹空いてんだよ！（怒）アンド（泣）！」

所変わってテイカー邸（ロジャーの家）

♪♪♪

可愛らしいながらも、ちょっとコワイカンジの音楽が流れています。

「むかしむかし、魔法界に女の子がいました。

女の子は“滝つぼの国”といわれるエルフの国の王女でした」

ロジャー、不思議なもやもやを相手に語り出しました。

それに合わせて、影絵が動きます。

音のない拍手を、白い煙みたいな人たちがしました。

♪♪♪

むかしむかし（後書き）

映画の何が最高かといいますが、まずはスケールとクオリティです。映像技術がとんでもないのです。迫力とか。

私は作中のヒロイン愛美と同じく桂小太郎ファンですが、もちろん他のキャラクターも大好きです。

高杉晋助。声とか、雰囲気がかっこいいです。

主人公、坂田銀時。言うまでもない程スゴイ人。

エリザベス。喋ったり、オッサンの足が見えなければカワイイ生命体です。

神楽ちゃん。カワイイですね。とにかくカワイイから好きです。

志村新八。眼鏡。素敵な眼鏡。あ、私の顔にもかかってるじゃないですか。アレ？新八くん。いつの間に分身の術を覚えたの？なんで三次元にいるの？いつか行った店で大量に並んでたよね？アレ？お父さん？何で顔に新八くんがいるの？あ、私の顔にもいる。

桂小太郎。いつ見ても美人さん？超好き？

空知英秋。銀魂の原作者。ひかりの憧れの人。いつか会いたいと思っています。

・・・こんな感じですかね。

あつ。真選組がいまね。次の機会に語ります。
知らない人は見なくてもいいです。

あと、桂小太郎ってホントに美人なんですよ？

気づいてますか？銀魂知ってて真選組ファンの方？

じゃあ、またいつか。

昔々 アリアという少女がおりました（前書き）

桂小太郎 愛しすぎて金が・・・二次元は金がかかります。

昔々 アリアという少女がおりました

可愛らしいながらも、ちょっとコワいカンジの音楽が流れています。
影絵がゆらゆらと踊っています。

昔々 魔法界という世界には 滝つぼの国というエルフの王国がありました

滝つぼの近くにあり 水と森に守られた美しい小国でした

国は 若い女王に治められていました

女王の名はアリア・セシリア

強大な魔力と知性を持つ 美しい少女王でした
学生でした

アリア女王には 未来を視る力がありました

が アリア女王には 視た未来と 他者と自分の運命を変えることはできませんでした

なぜならアリア女王は幼いころ 巨大な運命に逆らい 最愛の父を殺したのです

大好きだからこそその行為でした

父と 母を殺して父に毒を淹れた者 両者への思いやりでした

その時その場所で死ぬハズではなかった彼は死に 数多の魂の運命が変わりました

それこそ想像を絶する数でした

「星の数ほどの魂」と言っただ方がいいのかもしれませんが

愛する者を自らの手で殺した

幼いアリア姫の中に闇が生まれました

愛が為に行っただからこそその闇です

しかし アリア姫は深い闇を知らながら 輝きを失うことはありませんでした

漆黒の空に浮かぶ月のように アリアは世界にありました

そして月は 闇に生きる者を照らし導いたのです

時を経て 滝つぼの国の王が死に 王位継承者のアリア姫が玉座に座りました

しかし アリア女王は知っていました

領地拡大を企む大国が 水と緑と地形の豊かなこの国にやって来ることを

アリア女王が国を治めて数年　といってもまだ年も浅い頃　その時
がやってきました

後に“呪われた王国”と呼ばれる国の“汚れた王”が　大軍を引き
連れやってきたのです

エルフの方が　人間よりも身体能力は有利でした

が　兵の数は敵国側が圧倒的に有利でした

滝つぼの国の兵は　七日もしないうちに壊滅されました

国はもう　領土を奪われるだけでした

嘆く民に　アリア女王は高らかに言いました

「逃げて　生きる」

まるで　死んでしまった愛する者に代わるように言いました

準備のいいアリア女王は　当時交流のあった遠い東の国　“せいあんこく聖安国”
への移住をお願いしていました

土地も用意できているとのことでした

民の説得は大変なものでした

ですが アリア女王の必死な言葉に 民は心を動かされました

全ての滝つぼのエルフの民は 夜が明ける前に土地ごと聖安に逃れました

夜が明けました

アリア女王は 城の見える 滝の水が落ちていく崖の上に立っていました

敵の目を欺くカモフラージュの 幻の国を静かに見下ろしています

アリア女王は 風のような歌声を發しました

アリア・セシリアの能力 精霊を操る森羅万象です

精霊への伝達などを終えると アリア女王は歌いました

滅びゆくにへの鎮魂歌^{レクイエム} 滝つぼの国の子守唄でした

金色の月が空に昇った

水面に映る月 辺りを 月明かりが照らす

そこはほら 夜の国

滝つぼの轟音 森のささやく声 川のせせらぎ

それは 風が運ぶ 子守唄

眠れよ 三日月の揺りかごで

見上げれば 星の海 流れぬ星星のかわ
全てが優しい輝きで お前を包み抱く

精霊の歌 夜の歌を歌う

愛しい子よ ほら 夜の明けぬうちに ・ ・ ・ 眠れ

時がきました

アリア女王が両手を広げると 精霊が集まってきました

まず アリア女王は魔力と精霊の力で 城の建つ丘を除く王国全体
を 地盤沈下させました

そして 流れこむ水の力と量を増して 城を除く王国のすべてを水
底に沈めました

こうして 滝つぼの国は滅びました

国の最後の王 優しく美しい少女王アリアの手によって 見守られ
ながら

永遠に眠りました

♪♪♪

「アリア・セシリアはその後、15歳で旅に出ました。
愛する父が廻った国を。民の待つ、聖安国を目指して」

音のない拍手がおこりました。

「そして歴史は続く」

♪♪♪

影絵が礼をしました。

昔々 アリアという少女がおりました（後書き）

真選組をいじります。

土方。クールでカッコいい真選組の副長。マヨネーズを愛する男。

沖田。ひかりは結構好き。爽やかな外見とは裏腹に、超ドS。スキあらば土方を殺そうとしているコワイ人。真選組の一番隊隊長。

山崎退。真選組の監察。バトミントンとカバディを愛する地味な男。
かわいそうだからこの人だけフルネーム。

ゴリラ。真選組局長、近藤の見た目とあだ名。警察でありながら、一人の女性のストーカーで、よくボコボコになる。
桂に近づくな。ゴリラ。

序章（前書き）

お久しぶりです。

さア、今月も暴れちゃっつよ。

序章

選えらびなさい 道みちを
逆さからいなさい 運命さだめに
もがき続けなさい 一生を

他愛もない言葉だった

だが、そう言った者は、モノローグをやってるこの人を殺して消えたのです。

アリアという、聖安国の女王でした。

モノローグは続きます。

どんなに恋い焦がれても 手は届かなかった

どんなに恋い焦がれても 表現することはかなわなかった

彼の漆黒の髪を、風がゆさゆさと揺らしています。

『闇の王』と云われる彼は、我らが世界、魔法界という“無族界”

に来ています。

一波乱起こりそうです。

『ズラじゃない キャプテンカッターだ』

もうおなじみの目覚まし音の後、愛美はスグに起きました。

「おはよう。竜、ベル」

「「おはよう。マナ」」

「……はい、はい。はあ。分かりました。気をつけます」
ガチャン

魔法界と繋がる電話を、ロジャーは置きました。

そして「むゝん」と唸ります。

「どうした？」

愛美ちゃん作のクッキーをつまみ食いしながら、竜がやって来ました。

本日はテイカー邸にて、お菓子作りが行われているのです。

ちなみに、竜はすでに五回ほどオーブンを紅蓮の炎の世界にしたので、休んでいます。

クッキーも炎上させていました。

「いやゝなんか。闇の王さまがこっちの世界に来てるらしい」

「日本に？琉球王国に？」

「さあ。どこにいるのかまではわかっていないみたい」
ふふんと鼻をならす竜。

しかし、ふたりは知りませんでした。

愛美がホットケーキミックスを混ぜながら、その話を堂々と聞いていることに。

「闇の王」

一瞬、愛美の茶色い瞳が青色の光を帯びました。
でもそれは、マナミ本人を含む誰も気がつきませんでした。

序章（後書き）

最終章に突入しました。

今から次回作を考えています。

候補は、王様モノ。旅物語。魔法界の学園モノ。悪魔2匹と女の子の話。

どうしようかと思っていますが、一番やりそうなのは“戦記モノ”ですね。

じゃあ、サヨナラ。

夢世界にて（前書き）

新キャラがシーンを独占します。

夢世界にて

アリアの夢世界には、アリアが使役する存在が沢山いました。魔力を封じたタロット。ステッキ。

成仏せずにアリアに仕える霊魂。精霊。

水晶でできた、強大な力と刀匠の魂の宿った魔剣。

陰陽師の資格を持つアリアの式神。神器。

エトセトラ エトセトラ ……

そんな中の式神は、夢世界の出入り口にもなっている湖に立ちました。

滝つぼから、絶えず水が流れてきます。

湖の中には、ガラスの棺がありました。

中には、ほとんど再生したアリアの身体があります。

目覚めの時はもうすぐのようです。

その式神の日課は、日が昇る頃と沈む頃に棺を眺めることでした。

式神は見ていました。

そろそろ日が沈みます。

さて、居城に帰ろうと目をそらしかけたとき、アリアの目が開きました。

でもすぐに閉じてしまいました。

今のは幻覚か？と式神が疑った時、せっかく再生したばかりの一部が消えました。

光の粒子になって消えました。

そして、また光の粒子は集まり出し、ゆっくりと身体を創っていきます。

式神はアリアの力を感じました。

「月夜様^{つくよ} まさか、“夢うつつ”になりんしたか」

“現実世界”では、愛美が布団にもぐりこんだ時でした。

愛美の両目は、一瞬だけ青色に変わりました。

アリアと同じ色でした。

小さな歴史のアンコール（前書き）

アリア覚醒。

小さな歴史のアンコール

愛美は夢を見ていました。

「桂よ夢に現れよ！土方でも可！」と叫んで眠ってから、一時間くらい経っていました。

暗い所に鏡がありました。

綺麗な銀細工の施された鏡は、闇の中に浮かんでいます。

映った愛美も、はっきりと見えました。

愛美はぽかんと見つめます。

鏡の中の愛美も、ぽかんと見返します。

すると、変化がありました。

鏡の中の愛美の両目が、海とか空とかのような青に変わったのです。

瞳孔まで同色なので、存在を確認できません。

「？」

天然パーマはストレートになり、腰まで髪が伸びました。

「！」

そこで気づきました。

変わっていくのは鏡の中の世界ではありません。愛美自身が変わっていくのです。

驚いて髪を掴み見て、また鏡を見ました。

愛美は完全に变身していて、鏡には“アリア”が映っていました。

変化はそれだけに留まりません。

アリアは大人になりました。

父親譲りといわれる澄み渡った青い瞳、整った顔立ち。
母親譲りといわれる体格。胸は大きく、細身。
あ、父親も細身だったな。

暗い空が揺らぎ、アリアは日本風の城の中にいました。
障子を開くと、蝶々が入って来ました。

アリアが蝶々を目で追ってまた外を見ると、沢山の屍が横たわって
いました。

戦場でした。

アリアは外へ出ました。

戦場を歩いていると、見知った顔がいくつかありました。

沢山のエルフ、巨人族、ケンタウルス、人間などの種族が死んでい
ます。

それでもアリアは止まりません。

自分でも不思議なくらい落ち着いています。

「アリア」

呼ばれて振り向くと、そこには漆黒の瞳と黒髪の男がいました。
「ゲイル」

アリアは嬉しくて近寄りました。

ゲイルは笑顔を向けながら、刃を振り上げました。

マナミは飛び起きました。

心臓がうるさく鳴っています。

荒い呼吸音は、マナミが放っているものでした。

刃の煌めきが、瞼に焼き付いています。

震えながら携帯電話を開きました。

愛するキャラクター、桂小太郎の待ち受け画面が出迎えます。
03:49の数字がありました。

「んな？」

ベルが眠そうに出てきました。

「マナ？どうかしたか？」

ただならぬ主の状態を察知したベルは、マナミの膝に飛び乗りました。

「マナ？」

「ん？ああ」

マナミは虚ろな目のまま返事をしました。

ベルの耳はぴくりと動きます。目がかつと見開きました。

「まさか」

マナミは優しく笑うと、そのまま枕に倒れました。

寝息をたてるマナミの枕元に、ヒトがひとり座っていました。

やや長い髪は、茶髪ですが毛先数センチだけは金髪です。

身長高めな彼は、マナミを見ていました。

「…夜明けか」

彼はそう呟くと、白猫の姿になって寝床に潜りこみました。

小さな歴史のアンコール（後書き）

最終章っぽくていいんじゃないでしょうか？

コトの始まり（前書き）

お久しぶりでございます。

コトの始まり

マナミは起きたら、まずはご飯にかかりました。
トーストを焼いてバターと苺ジャムを塗り、冷蔵庫に存在するケーキを食べました。

ベルにはミルクを与えておきました。
あとは勝手に物色して食べるので、放っておきます。

父母は仕事。
妹は修学旅行。
兄はどこぞ？

家には今、マナミとベルのふたりだけです。
ベルは遠慮なく人型になり、お玉で素振りをしています。

マナミはアリアの頃を思い出しているので、全国語を知っています。
この間に宿題を終わらせました。
一応、ところどころ間違えておきました。

一時間後。

だらだらとふたりで『銀魂』を観賞しています。

「マナよ。まだ桂小太郎は好きか？」

「大好きさ」

「そうか」

「カワイイよ。小太郎くん」

「ま、中身もカワイイからな。ヅラ様」

銀魂の単行本が開かれました。

「高杉晋助、イイな」

マナミはぼそつと言いました。

「え？ マナは銀サンだろ。百歩譲っても白夜叉だろ」

「高杉は夜叉（アリアの友達）にソックリだろーが！」

「どこが!？」

「もしくは……グイル？」

「うむ。グイルくんだ。確かに」

『この世界をぶっ壊す』

そう。奴はそう言ったつけ。

きや ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ ああ ああ ああ ! ! !

ロジャーの絶叫が聞こえてきました。

「!？」

「何？何？どうした？」

マナミとベルが戸を開いて聞くと、ロジャーは泣きそうな声で答えました。

「りゅーくんがされわれたアア！」

沈默
•
•
•
•
•

「「なんじゃとゴルアアアアああアアあ！！！」」
ふたりは勢いよく室内に戻りました。

ベルが真剣を素振りしている間に、マナミは巫女の衣装に手早く着替えました。

「何でそんなもんがあるのか」という質問には、床に四散したプリンス、ナース、妖精、ミニスカポリスなどのコスチュームを御覧になることで勘弁していただきたい。

戦闘態勢になったふたりは、テイカー邸に踏み込みました。

「「たのもー！！！！」」

開けた道のその先へ

何だか豪華な部屋に、竜と雷らいがいました。

竜は、性格と目を変える魔法具の眼鏡をしていません。

龍の眼は丸出しだし、性格は丸変わりだし、知らない人恐いしで大変してました。

（テイカー邸）

「異空間。入口はココだよ」

「ふむ。わかった。ありがとう」

ロジャーとマナミが、水晶玉を覗きながら対話していました。

「俺もついて行けたらよかったのに。ごめんよ」

仕事があつて行けないロジャーが、残念そうに言いました。

手には桂小太郎のぬいぐるみ（攘夷戦争バージョン。愛美ちゃんお手製）を持っています。

完成度はかなり高いです。

マナミとベルは、爽やかなロジャーの応援を背に受け、歩を進めました。

目指すは森の中。

異空間に存在する“夜の一座”のアジトです。

マナミの周りを、赤い精霊が飛び回ります。

嬉しそうに飛び回る精霊は、異空間への道を簡単に開けました。

「おのれ、夜の一座め。待ってるよ、竜王」

「ベル。少しは落ちつてくれ。というか、そのでっかい剣はどこにあった？」

マナミはベルがしょっている、やたらとでかい長剣を指して言いました。

「マナの兄ちゃんの落書きを具現化した」

「あゝ。『お兄ちゃん』は武器が好きだから。戦闘機は嫌いらしいが」

「だってウルサイもん。なんであんなもんが民家の上を普通に飛んでるの？」

「こつちが聞きたいわ」

雑談を交わしながら、緊張感を全く漂わすことなくふたりは乗り込みました。

「そもそもさ、何か穴の周りにやたらと霊が見えるんだけど？」

「……。お祈りして通り過ぎなさい」

「で、あの穴は何？」

「ガマだよ。あそこに戦争中は人が隠れたんだ」

「ふゝん。アレ？マナ？何で泣いてるの？」

「勝手に出てきたんだよ。前がかすんで見えない。どうしてくれるんだ」

「ふゝん？」

「あの人たち、可哀そうだな。何か」
「可哀そうでしょ。とっても」

開けた道のその先へ（後書き）

月桃の花が咲いていたそうなの。
戦火舞う地獄の地で。

日本兵がいたそうなの。

沢山の島んちゅうを殺したそうなの。

沢山の人死んだんだそうなの。

知ってます？ “沖縄戦”

潜入！一座の天幕（前書き）

戦がなんぼのもんじゃい。

こちらら人生という名の戦場を駆け抜けとんのじゃい。

と、いうカンジで・・・

潜入！一座の天幕

竜王は雷と一緒にの部屋にぶち込まれているので、氣を使いまくっていました。

でも。いつ知らない人が入って来るともわからないので、べったりとひっついていきます。雷に。

「竜」

「ナニ？」

「お前にも魔力、あつたんだな」

「……………」

雷と竜は、魔力をもつ“無族”として誘拐されたのでした。

「竜」

「ナニ？」

「お前、ちよつと離れてくれない？」

「やだよ」

「離れてくれない？髪が触れるんだよ首に。くすぐりたいんだよ」
「ん」

竜王は髪が当たらないようにしました。

「……………」

「……………」

「竜」

「ナニ？」

「確かに、髪は当たらない」

「うん」

「でも離れる。
てかお前、性格変わってね？そんなキャラだったっけ？」
「うん。素は」

マナミとベルは、ガマを抜けようやく侵入しました。

「さて、俺たちの竜王はどこだ？」
「あゝ。いるいる。お兄ちゃゝお兄さんもいる」
「マジでか」

呑気ともとれる会話をしながら、ふたりは回廊を進んでいきます。

マナミは唐突に、腰にひっかけていた幣ぬさを取り出しました。

幣とは、アリアの神器です。

桜の木を使った棒に、紙や麻ではなく、いくつも長く連なった水晶が下がっています。

白い“龍のひげ”が水晶の連よりも長くのびています。

頂点には月長石ムンストーンの三日月があります。

付け根には、金色の小さな鈴がついています。

マナミは、鈴を可愛らしく鳴らしながら一振りしました。

ちりん

「白狐びゃくこ 召喚」

ポム！

「お喚びですか。美しい主、月夜様つぐよ」

白く輝く美しい狐が現れました。
声の響きや高さから、女の子だと分かります。
まつ毛が長く、ふさふさの尻尾が三つ生えています。

「神器に」

マナミが言いました。

「はっ。形状は？」

「棒型で。刃にはならないで。流血沙汰にはしない方が良い」
「かしこまりました」

白狐は幣に取り付けました。

幣はたちまち純白の、水晶が飾りになって先端に鈴のついた棒になりました。

白狐は変幻自在の能力を持った式神です。

幣に取り付き武器化するのも能力の一つです。

ちなみに、白狐曰く「剣に付けば…憑けば？もつとすごい」らしいです。

それ言ったらアリアに「フィアン（魔剣）に任せるから」と断られました。

「マナ。武器なんてその身体で使ったことあるのか？」

「なぎなたの授業があるから」

「そんなマナの戦闘力は？」

「……」

マナミは棒を眺めて聞きました。

「大丈夫だね？」

返事はスグに帰って来ました。

「はい。筋力ならいくらでもカバーできます。形だけ作ってください」

れば良いですよ」

「って？」

「……。ハア。変わらないな」

ベルが呆れたような、でもどこか嬉しそうな呟きを発した時でした。

「ん？」「あ」

正面に人が来ました。

「おつ。マナ、行く？」

「勿論」

マナミは武器を構えました。

瞳には、今までになかった輝きがあります。

戦場に降りたかの姫のような

潜入！一座の天幕（後書き）

次はレッツパーリ！。

舞姫（前書き）

どうかにあつたよな。こんなタイトル。
そう思いつつ、私はレッツパーリーします。

舞姫

白狐の化けた棒が、空気を斬って風の音を奏でます。

てこの原理を応用して、マナミは一座の人の首を上からたたきました。

着地すると、すぐに棒を滑らせて握り直します。

上段に構え、援軍の一名をすぐさまノックアウトし、跳ね返った力を利用して、しゃがみながら後ろの人のお腹辺りに一撃くらわします。

やられた方は反射的に頭をマナミの方に持ってきましたので、マナミはその頭を棒の下部分の方で殴りました。

あと二人。

ぴょんと相手の懐に飛び込み、自分の身長より長い棒で打ち込みました。

しゃがんでくれたので、後ろにいた一人の顔が見えました。

マナミは軽々と一人の背中に足を掛け、背中を足場に高くジャンプしました。

棒を床と垂直にしたまま、もう一人の頭上に落下します。

一撃で昏倒しました。

あと一人。

ふらふらな最後の一人の膝裏をコンと押し、仰け反らせます。

下から上に棒を素早く振り上げ、後頭部を強打してやりました。

マナミ、完全勝利。

この間、約15秒ほど。

「アリアの状態なら3秒くらいか？」

「そうだよ。まったく、人間の身体は楽じゃないね。好きだけど」

汗もかかず、息切れ一つしていないマナミは、ベルと再び歩き出しました。

「竜、離れるなよ」

「言われなくても離れない」

雷が言つて、雷の腕にひつついている竜王が返しました。

ふたりは今、夜の一座の面々に囲まれています。

「ヤベーよ。コイツら、超メンチきつてるよ」

「メンチ？これが？」

「いや、実は目からビーム出そうとしてるんじゃないのか？」

「…うん」

竜王と雷がそんな会話を交わしている頃、マナミ&ベルは。

「百眼ひゃくめ 召喚」

大きな目は顔の真ん中に一個ある、鷲のように大きな大鳥が現れました。

「お久しぶりです、月夜様つぐよ。お会いしとう御座いました」

百眼は目に涙を溜めながら、丁寧な口調で言いました。

「百眼、竜王と雷（お兄さん）を探してきて」

「御意」

百眼

情報と探索の式神。

その巨大な目の玉に映した物を主に見せることのできる能力を持つ。
伸び縮み可能。

百眼はすぐに竜王を発見し、鍵穴から侵入しました。

「竜王」

「百眼？」

「月夜様がお見えです」

「！」

竜王は小さく息を飲み、（雷を除く）誰にも見られていないことを確認してから話しました。

「アリアが？」

「や、記憶と霊力だけの目覚め、“夢うつつ”で」

竜王は百眼に向かって言いました。

「マナ、人がたくさんいる」

竜王の声と姿は、百眼を通してマナミに伝えられました。

「俺はここだよ。アリア」

「見つけた」

「じゃあ急ごう。待ってる、竜王」

マナミとベルは軽やかに走って、百眼が見つけた場所へ向かいました。

舞姫（後書き）

初のバトルシーン細かく描写スペシャルでした。
式神たちの活躍にこうご期待？

再戦（前書き）

さいせんって書いたら再選って変換されました。
何を選ぶというんだ…。

そんなこんなで17話です。

再戦

シャラン

幣の鈴がぶつかって鳴ります。

「天に在りける天照アマテラス 夜に君臨くんりん月天月読ゲツカ ルテン 夢幻泡影ムゲン ホウヨウ
闇人らを退け道を開け 月下流転」

招かれた戦闘用式神、夢幻は両手を刃状にして、邪魔者を一気に片しました。

「終わりんした。月夜様」

「よし。じゃあ夢幻とベルは先に行つて」

「え？」「はい？」

ベルと夢幻はキョトンと聞き返します。

「やることができたから。大丈夫、後で行くよ」

マナミは幣を振って言いました。

「振舞えんぶ 風神」
砂埃勃発。

「つくよさまアアアアアアアア！！！」

「マイ・ロードおおおおお！！！！（黒執事）」

「月夜様ったら。白狐だけを連れていくなんて。ズルイであります」

「お前は信用されてんだよ」

ベルがたしなめました。

「常夜は寂しくないのではありませんか？」

「寂しいわ……。メチャクチャさびしいわ……」

ふたりは足を止め、そこにあつた扉を蹴りで開けました。

竜王がみたのは、ふたりの男でした。

ひとりは肩にかかる位の神で、茶髪だけれども毛先数センチは金髪です。

右目の下に三ツ星が並んでいます。

ひとりは腰まである長髪で、髪の色は白でした。

左の顔を覆い、左目をふさぐ大きな傷が目を引きまゝす。

ふたりとも長身でした。

「ベベル」

「竜王！」 「日輪（竜王）！」

「~~~~~」

「りゅー　うおおおおおおおお」

ひしつと抱き合います。

「あ、ワタクシは無視でありんすか？」

あまりの出来事に放心状態だった一座の一人が回復し、素敵なこと

を言いました。

「なっ…何奴じゃ貴様らアアア!!」

これにはベルが反応します。

「おお。兄ちゃん良い事言っじゃねえか。

あ、そうだ。もう一回やり直すからもう一回同じの言ってくれ」

以外なリクエストに一同も「あ？ああ？」となるしかありません。

ベルと夢幻は壊した扉を綺麗に直すと、「じゃっ、お願いしまゝす」と言っ出ていった。

竜王をつれて。

心配になった一座の一人がドアに近づき、耳を当てました。

「だからお前、違っって言ってるだろ」「ワタクシは最後が良いのでありんす」「じゃあとりあえず、俺 竜王 夢幻の順番でいいか？」「いい」「そうか、じゃあ次はセリフを…」

彼はドアから耳を離すと振り返り、

「本当に登場の会議をしています」と報告しました。

次の瞬間。

ドゴオオオオオオオオオ!!!!

ドアが吹っ飛びました。

「ぐああアアア」

「「「マイケルうううううう!!!!」」」

「なっ…何奴じゃアアア!!」

律義な人は言いました。

ベルが登場します。

「月姫が闇の守護者。ベル」

竜王（まさかの大人バージョン）が登場します。

「アリアの太陽の守護獣。竜王」

夢幻と百眼が登場します。

「月夜様が式神、百眼です」

「同じく月夜様が式神、夢幻でありんす。どうぞよしなに」

「「レッツパリーイイイイイイイイイイイ！！！！」」

ぎいやああああああああああああああああ

ドゴォ バンッ バシッ

「元気だな」

「まったくです」

「つーかお前誰？竜？」

雷の当り前の質問は当たり前のように無視された。

再戦（後書き）

最初のアレね、考えるのが楽しかったです。

多分、次に使われる時は若干違うと思いますが、気にしないでください。

ちなみに解説しますとね、

天に在りける　　月天月読　　までが冒頭みたいな

夢幻泡影　　は式神の名前

闇人らを　　道を開け　　が命令文

月下流転　　はアリア（この場合はマナミ）のことです。

戦いのおわり。

「何イイイイ！？月姫さまの守護者あああ！！？」

雷の絶叫が響きます。

「そうだよ。まあ竜王の場合は守護獣だけだな」

「はっ？獣？」

「俺たちのことはいい。さっさと帰れ。魔術師^{まじ}」

すでに脱出用のゲートを作った竜王は、雷を急かします。

「お前らはどうするんだ？」

「主^{あるじ}の元へ戻る。後で会おう」

「じゃあな」

「ワタクシとはもう会うことは無いじやろっ」

あくまで雷くんには帰ってほしいお三方です。

「月姫さまがいるのか！？なら挨拶を……」

「しつこい」

「帰れ」

「失せろ」

かくして少年は、お尻を蹴飛ばされてゲートにぶち込まれ、強制的に帰されたのでした。

銀を弾く黒髪に、青い目の女性、アリアが立っています。
その眼に映るのは、闇の王。

「…囚われていた少年は、返していただいた」
「そうか」

「他の魔術師さんたちは、間に合わなかったようだが」

アリアがちらりと見た先には、魔力を吸い尽くされた人間がぼうつと座っています。

「私は、いまあった事の全てを忘れる。グイルに会ったことも」
「…そうか」

しばらくの静寂がありました。

「私は、もうすぐ戻る。私の生まれた世界に。魔法界に」

グイルはアリアを見ました。

「グイル。今一度問う。光側ひかりに戻る気は無いか？」
「俺も今一度聞く。闇くろの側はたに来る気は無いか？」

ふたりは真っ直ぐに見つめあって言いました。
「「無い」」と。

「戦争がまた、始まるな」

「勝つのは私たちだよ。ゲイル」

「何故そう言いきれる？」

「それは、後でのお楽しみ」

アリアは悪戯っぽく笑いました。
いつかしたその会話はスグに終わりました。

「「マナ」」「「月夜様ああ」」

「おや。もうお別れの時間か」

遠くからの声を聞き、ゲイルは呟きました。

「竜王。ベル、百眼。夢幻」

「アリアああああああああ」

竜王が抱きつきました。

「久しぶりに見た。アリアあああ」

「おお。やっぱり美女」

「って、アレ？闇の王？ゲイル・ジャスティス？」

ベルが気づきました。

「よオ。相変わらず髪の色が二色だな。ベル」

「それがどうしたか。ってか何してやがんだこんな所で？」

まさか日本にいるとは思わなかったグイルに、ベルはツッコみます。

「ヤンチャしてる手下共の回収にな。何。用が済んだらさっさと帰るよ」

「……。一応魔法界に通報はしとくからな」

「ああ。ついでに、魔力のある人間をしつかり護れとの苦情も入れといてくれ」

グイルは、そこでのびている人間を指さしました。

「全くだ。おかげで私は半年、復活を遅らせることになった」

「え？」

「本当なら、明日にでもアリアに戻れたかもしれないのにね」

「身体はほとんど再生していたのでありんすが」

「チッキシヨー！俺と竜王の貴重な時間を返せバカヤロー！！」

グイルがこの瞬間、

「この騒動の原因奴らは皆殺しにしよう」

と思つて、後に実行したのは秘密です。

「まあいいじゃないの。なんでも」

「よかねーよ！」

「帰ろう。マナミの世界に一旦帰ろう。夢幻と百眼は夢世界にね」

「「はい」」

シュンツと、式神たちは消えました。

夢世界という空間に戻って行つたのです。

「俺があの手共を引きつけている間に、お前らは逃げろ」

「マジ？いいのかよ。魔王陛下」

「フン。どうせ戦うなら、れっきとした戦場でがいいからな」

聞きましたか？皆さん。　コイツがツンデレという物です。多分。

「ありがとう、グイル！ホラ、ふたりも」

「「ありがとう」（棒読み）」

さんには、瞬間移動とよばれる魔法を使って帰りました。

帰った瞬間、愛美は今までの事を見事に忘れました。

戦いのおわり。(後書き)

お久しぶりです。

同時進行の阿修羅華ばかりやってたら忘れてました。
(笑)

おわり（前書き）

こんなバカみたいな読み物を最後まで読んでくださった皆様へ。

本当にありがとうございました。

バカ作家、ほしぞらひかりの初めての完結作であるこの「リュウとマナと魔法」はこれにて終了です。

同時連載の「姫と悪魔と魔法」、「阿修羅華」も、機会があれば読んでみてください。

アリアとグイルの関係性がわかります。特に阿修羅華で。

竜王やベルとの接点は、姫と悪魔と魔法の方が分かりやすいかと思います。

以上。

ほしぞらでした。

あとがきへ続きます。

おわり

ジリリリリリ♪ ジリリリリリ♪ ガチャ

「ハイもしもし。テイカーです。……はい。はい。…そうですか。ありがとうございます。では」

ガチャッ

「？ 誰からだ？」

竜王がソファーに寝転がったまま言いました。

「魔法界。闇の王が魔法界に戻ったって連絡」
「ふん」

ピンポン♪

「こんにちは」
「にゃ」

「おっ。愛美ちゃんとベルだ」

竜はがちゃつと戸を開けました。

「にゃ」
「こんにちは。竜。ロジャーさん」
「いらっしゃい」

「よう。マナ」

平和な一日が過ぎていきます。

秋。

一人の少女が死にました。
それと同時に、少女の愛猫もいなくなりました。

竜もいなくなりましたが、誰もそんなことは知りません。
「竜」という存在そのものを知らないのです。

「聖安国。…相も変わらず美しい国だ」

銀を弾く黒髪に、瞳孔まで青い瞳の美しい半エルフの少女が言いま
した。

その背後には、西洋と東洋の混血の白竜と、長身で茶髪で毛先だけ
が金髪の青年がいます。

魔法界に、新たな歴史が刻まれるでしょう。

おわり（後書き）

あとがきという名の栄光。

ちなみにその後、少女は聖安という国の王になります。
部下もいっぱいできます。

新しい恋もきつと……ゲフン！ゲフン！

彼女は書物が好きで、ベルが持って来たこっちの世界の本を読んでいます。

お気に入りには「Dグレイマン」「ぬらりひよんの孫」「週刊少年ジヤンプ」そして勿論「銀魂」です。

なかでも一番のお気に入りは「銀魂」なのですが、下ネタが多いという理由で、アニメはなかなか見せてもらえません。

桂小太郎が出ている話だけ、ギリギリ見せてもらえている状況ですが、本人はこっそりと全アニメを録画して見てます。

ルカという騎士がいるんですが、ソイツは、率先して「劇場版銀魂 新訳紅桜編」を見せてくれました。
理由は

「俺も好きだし、何より下ネタが少なく、高杉が最高だから」
です。

それがどうしたという情報でした。
てへっ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6185j/>

リュウとマナと魔法

2010年10月9日13時47分発行